

はない。主人に頼んで、私と娘二人は船室に残った。悲しいドラの音を響かせて、船はその場を一周してくれました。

誰も彼も、みんな悲しく辛い引揚げ行だったに違いないが、その前後に、二人の子供をなくし、亡骸も、遺骨も内地に連れ帰ることすら出来なかつた私達は不幸のどん底であつた。

市川半蔵さんの報告で、心待ちしていた両親もガツクリ肩をおとすのだった。

労苦の体験

熊本県 吉村 貞女

昭和二十年八月九日、ハルピンの空に飛行機が現れた。アメリカの飛行機と思つたら、ソ連機である。あちら、こちらと爆撃した。それは全く皆意外であり、口惜しい無限の感情がこみあげていました。

やがて、ソ連兵がわが家に無断で土足のまま侵入し、

物盗りにきた。時計、衣類を持って去つた。抵抗もできず、残念でたまらない。

戦争で敗ければ、盗られても殺されても仕方もないものかと憤怒やり方なかつた。

夫が満州国医科大学の庶務課に勤務していたので、同僚の鮑さんに貴重品をトランク六個に入れて預かつてもらいました。平和になつたら届けていただく約束だったが、引揚げ直前まで音沙汰はない。

収入は無し、衣類その他を売り払いました。

吉村家の紋のあるのは先祖に申し訳ないから売らないと言つたら、主人はじゃがいもも買えなくなつたらどうする、と言われ、五十円、百円と売り払つてしまつた。

そうした中で、二十年十二月十日、姑を亡くし、二十一年三月四日に夫を亡くしてしまつた。敗戦の食うや食わずのどん底の混乱生活の中の不幸に次ぐ不幸は言葉も文字でも表現できない苦勞を通り越した悲痛きわまりないことであつた。読経は済ませたが、火葬場までは危険だと言って、心ならずも遺髪だけ抱いて

きました。今だに済まないと思ひ残念でなりません。

夫を失い、父を失った母子三人の生活であります。

二十一年八月二十四日、引揚げ命令が出ました。一人千円だけ持ち帰ってもよいとのこと、母子三人で三千円、少しでも多く物を持って帰りたいと思ひ、ハルピンに避難していた二十歳の男性に、リュック一杯の普段着と千円を渡し、帰国したら吉村家まで届けてもらう約束を下さった。しかし引揚げてから何回便りをしてでも音沙汰はありません。

長女九歳、長男二歳、冬支度での出発でした。おむつ四十枚、食品、薬品などを持って貨車にのつたが屋根もなく座ったきりの場所で用便は、その場で済ます以外にない、十日目に奉天に着き、十日間旧日本軍兵舎の土間の上で寝る。飯盒で飯を炊く、ヤミ市から物を買ってひもじさをつなぎました。

次は奉天を出発して時々停車すると大便の臭のはげしいこと生きた心地なしの地獄であった。

コロ島に着いたのは、出発して三十日目ぐらいたったろうか、ここでも日本船の来るまで数日間待たされ

ました。

コロ島の港に、やっと迎えにきた日本の船が来た時の嬉しさは今だに忘れられない。

乗船して、温かい麦飯のおにぎりをいただいた時の喜びは忘れられません。人間も動物も同じですが、食べる物の無い、食べるものの一切をソ連兵に盗られたときほど困ったことは無かった体験をした私達は、麦飯のおにぎりの味を、涙と一緒に呑みこんだのでした。

四十枚持ってきたおむつは四枚だけになっていた、博多港に着いたのは、十月四日でありました。

甲板から眺望する。わが祖国の陸地に森と山々の青々と茂る有様は母なる国、父なる国と神々しく肌を感じ、涙がとめどなく流れる。

上陸する私共が大勢の方々、特に白いエプロン姿の婦人会の方々の出迎えに感激したのは深い印象に残っている。DDTの消毒や検査をしていたから博多を出発し、列車から眺める祖国日本の市街地の建物から、人々の顔はみな親しく、又一草一木はみな私共の引揚げを喜んでくれているかに感じた。

やがて熊本に着いた。両親や妹達みな喜んで迎えてくれたが衰弱した私共母子三人の姿をみて悲喜交々の涙、滂沱だった。

平和をかみしめながら生きている

宮崎県 高橋 ミキヲ

私は満州国東満総省牡丹江市より引き揚げた者ですが、その当時のことを思う度に筆舌に表されないほど胸が一杯になるのです。一変して敗戦国民となり、ソ連軍、国民軍、中共軍に脅かされ財産も名誉も剝奪され、引揚げ者となり親子三人どうして暮すのか心細い終戦当時でありました。

昭和十一年八月、亡夫春樹と結婚し、昭和十三年一月に長男が生れ、十月に南郷小学校から満州牡丹江市の聖林小学校勤務のため、親子三人と実妹の四人で日本を後にしました。着任した聖林小学校は、建築中でしたが、職員住宅は完成していたので、落ちつくこと

ができましたが、淋しい所で不安な毎日でした。

昭和十四年七月次男が生れ、昭和十六年五月には三男を出産しましたが、その三か月後に長男と次男がアメルバ赤痢にかかり、突然の発熱を起こし、隔離病棟に入院しました。四十日経過した九月三日、長男は死亡、次男はどうか命をとりとめました。主人は三叉神経痛を病んだ他は元気で、全満小学校放送などもしていました。

昭和十九年二月長女誕生、主人は昭和二十年四月、教頭を命ぜられ、多忙な毎日でした。六月に学校職員バレー大会があり、夫はその競技中に腸捻転をおこし、急遽、満鉄病院に入院しました。一か月余で退院はしましたが、なかなか元氣になれず、通院をしていました。

八月十一日突然の避難命令が出ました。なんの説明もないまま、着のみ着のまま、食べものだけを袋に入れ、指令を待ちました。それ以前に、主人に召集令状がきて、兵事部に向きました。兵事部では、病人であることが判明し、数時間後とほとぼ歩いて帰りました。